

アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM

2006. 12. 1 No.53



アイヌ民族博物館オリジナル切手・ハガキセット発行

目次 CONTENTS

トロムセ（ノルウェー）での邂逅	中村 齋	2
へまた・てまな	北原 次郎太	3
企画展「西平ウメとトンコリ」開催・その後	北原 次郎太	5
上田トシさんを偲んで	安田 千夏	7
行事報告		8
INFORMATION		12

トロムセの邂逅

苫小牧駒澤大学学生の研修旅行随行

トロムセはノルウェーの北、北緯70度近くにある小都市で、札幌市も参加している北方の都市会議が開かれた場所で、アニメーションの「魔女の宅急便」のキキの出身地のモデルとも言われている、フィヨルドに面したこじんまりとした港町である。

2005年8月22日、我々、駒澤大学の環太平洋・アイヌ文化研究所で学ぶ学生を中心とした北欧先住民文化交流団一行は、所長の村井泰廣教授に率いられて、トロムセ大学を訪問した。トロムセ大学は世界で最も北にある大学を標榜しているがそれだけではない。北欧の先住民サーミの文化を扱っていて、サーミ語を使った講義も行われている。ここでは、数人の学生の教室での、サーミ語の文法の授業を参観した。教師も学生もサーミ語を普通に使っている。

北欧3カ国の北方圏（北緯66度33分以上）とロシアのコラ半島の広域に居住するサーミ民族の言語サーミ語は、現在所属する国の言語と併せて日常使われている。だから、子どもたちにも民族語として教授することができる。

小学校でサーミ語の教育が行われ、テレビの番組でサーミ語によるサーミのニュースが流されていたり、サーミ語の新聞が発行されていたりと、先住民として同じ歴史的境遇を有するアイヌ語の現状と比較すると、雲泥の差と言っていいだろうし、誠に羨ましい限りだ。

中学校の数学や理科の授業がサーミ語で行われにくい原因が、微分積分とか分子などの述語をどう翻訳するかとか、サーミ語で翻訳しながら教える教師が少ないとかの、高度な問題点であるのも、アイヌ語との言語水準の大きな開きを示していると思う。

彼我のこの違いはなぜ生まれたのか。

私はサーミ民族の生活域が北方圏以北であり、酷寒の自然環境が南方系の人々の侵入と定住を防いでいたからだと考えている。つまり、北方圏でサーミ民族は多数民族であり、異言語を常用語とする必要はなかったからである。

勿論、その底流には彼らの団結による早くからの、そして長い復権運動がある。

アイヌ民族の場合は、1869年以降の日本国家によ

る北海道殖民政策によって、日本語族の急速かつ多数の定住が開始されて少数民族となり、同化政策による日本語教育の成果もあって、アイヌ語が日常語として用いにくくなったのが、現在のアイヌ語教育の困難さを招いていると考える。

小さな客である我々を、トロムセ大学ではわざわざ学長が出迎えてくださった。学長の胸には地位を示す綬章がかけられていたので、旅の服装である我々が失礼をした形になり恐縮してしまった。

その歓迎の席に東洋系の少女があらわれた。この4月から留学しているその少女はアイヌ民族で、なんと我々の学生の一人の従姉妹だった。双方が遠隔の地での思わぬめぐり合いに驚き、そして懐かしんでいたが、一同の驚きも同じだった。

アイヌ民族博物館の観客から、よく「アイヌ民族は絶滅したのですか。」という質問を受け、「いいえ、世界中に住んでいます。」と答えて煙に巻くのを楽しんでいるが、その答えが誇大ではないことを彼女が証明してくれた。そして、駒澤大学の学生の存在と併せて、アイヌ民族の未来を創る若者の存在を確認し意を強くした。

それにしても、若者は、大人の思惑の外で自らの力で変革していくものだ。その変革の芽を育てるのはどんな大人のどんな作用なのか。教育の一端を担っている私の課題として常に意識していることなのだ。

8月16日ヘルシンキを出発点に、その後フィンランドの北方圏にあるロバニエミ、イナリ、ノルウェーのカウトケイノ、アルタ、最後のトロムセと巡って各地の研究所、大学や博物館を訪問し、学生達はサーミ民族の民族自律の歴史と具体的な行動をつぶさに見た。

8月25日、ストックホルムから帰路につくまで、若い眼差しが見つけたものは何だったのだろうか。

老の目には、帰りぎわ、トロムセ大学の校庭で自然発生したイオマンテリムセを踊る学生たちの表情には、旅の終わりの満足感と達成感が白夜の夕暮に溶け込んで見えた。

（館長 中村 齋）

《出張》 へまた・てまな

「へまた・てまな」は、当館PR紙『コタンメール』のコーナー

アイヌの英雄叙事詩（ハウキ、サコロペ、ユカラなど）には、英雄たちの超人的な戦いが数多く描かれています。戦いの場では色々な武器が登場しますが、男性の武器と言えば、なんといっても先祖伝来の刀剣類です。

英雄の刀は、カムイランケタム「神授の刀」とも呼ばれ、大木を一刀両断し、生き物のように飛び回って敵を斬る、鞘や柄に彫られた龍や狼の飾りが動き出して戦うなど、奇想天外な活躍をします。有名な「kutunesirka 虎杖丸」のように、こうした宝刀の名が、その物語のタイトルのようにもなっていることもあります。

また、刀剣は実生活においても、男性と特別なつながりがあると考えられていました。たとえば、男の子を授かりたいと思った時には、小さな宝刀が、これを模した木型をお母さんの枕に入れたといえます。これに対し、女の子が欲しいときは飾り矢筒を使います。

こうした刀剣や刃物類は、中国大陸や本州からの移入品でした。アイヌ社会にもたらされた刀剣は、いずれも太刀の形式で、大きく2種類に分けられています。ひとつはイコロというもので、これは拵（こしらえ＝鞘や柄などの外装）そのものが本州で作られ、完成品としてアイヌ社会にもたらされたものです。もっとも、イコロとされる伝世品は、ほとんどが刀身を欠いています。

もうひとつはエムシというもので、これは拵をアイヌが作り、本州で生産された刀身や鏑などと組み合わせたものです。

宝刀は、イヨイキリという「床の間」のようなところに下げて飾られ、また特に大切なものは美しい木箱の中にしまわれていました。そして、神事ときには、屋内の上座や祭壇にかけて飾り、神事に並ぶ男性たちも、盛装としてこれを身に付けます。

ところが、日本人と暮らすようになり、私たちの生活や価値観が変化するなかで、宝物を手放す人も増えました。先祖の宝が粗末になることを嫌って山中に納めたり、博物館等に寄贈した、古物商が買い取っていったという話もよく聞きます。銃刀法により、保管の手間が増えたということもあるでしょう。

近年は神事の復興が盛んになってきましたが、上のような事情で神事に用いる宝物類が残っていないというのは、どの地域にも共通した事情です。

こうした宝刀が珍しくなったためか、刀剣が盛装の一部であるということ不思議に思われることもあるようです。「どうしてカムイと向き合う場で、武器を身に付けるのか」「刀を持って踊るのは観光的な演出か」という質問を受けることもあります。そこで、今回は「へまた・てまな」拡大版として、かつての宝刀の使われ方を取り上げてみます。

祈りと刀

盛装の一部として刀を佩くという習慣は、樺太から北海道まで広く見られました。静内町（新ひだか町）にお住まいだった葛野辰次郎さんの祈りを記録した映画（1983年）では、葛野さんと対座の男性二人がエムシを佩いて祈りを行っています。もう少し古く1960年代に静内で行われた船下るしや、シャクシャイン祭の場でも、男性たちが宝刀を身に付けています。ずっとさかのぼって、1800年頃に書かれたといわれる『蝦夷島奇観』の中にも、盛装した男性が宝刀を下げている様子が描かれています。

それでは、どうして宝刀を身に付けるのでしょうか。神事の際、男性は神々に祈るだけでなく、身に付けた宝刀やサパウんペ（冠）にも次のような祈りとお神酒を捧げます。

エカシムツペ、カムイイペタム、アイヌミツポ、アアツテクス、テクサモロケ、アエコブンキネ、オカアヤクン、イレスカムイ、カムイパケセ、アエパウヌシリタパンナ。

（先祖の佩き代、神なる刀よ、人なる孫は、（何事も）覚束ないものですから、その側を、見守って下さるならば、火の神が口を付けた尊いお酒を、貴方の口につけますよ。）

二谷国松氏による。『知里真志保ノート』No.245より

この言葉からもわかるように、宝刀は、一種の守り神として考えられていました。宝刀や冠に限らず、宝物と言われるものは、持ち主を守り幸運をもたらすものと考えられていたのです。

採物としての刀剣

宝刀は、踊りの中で男性の採物としても使われます。藤本英夫さんの『アイヌの国から』という本に、静内の鷲塚鷲五郎さんのエピソードがあります。鷲塚さんの家伝の宝刀は、第二次大戦中に刀身を供出させられ、竹光になりました。拵だけになったとはいえ、家伝の刀を大切にしたいとのことで、鞘をつけたまま踊りに参加していたそうです。

樺太でも、男女が輪になって踊るとき、男性組の先頭に立った人は刀を持ったそうです。網走や美幌では、祈りの間は宝刀を祭壇に掛けておき、踊りが始まると手に持って踊りました。

スピーチには武器が必要？

もう一つ、宝刀が使われる場面として、ウケウエホムスという行為があります。実生活では、災害などがあつた際に、被災者と近隣の住民が、魔払いの武器を持って儀礼的なスピーチを交わすものです。一方、物語の中では、もっと色々な場面で武器をもったスピーチが行われます。

英雄叙事詩では、主人公たちの戦いがよく描かれます。戦いの中で、味方が合流したときに「あちらの方へこちらの方へ、戦いの仕草をしながらねぎらいの言葉を発す」という表現が出てきます。これは刀を持って空を斬るような仕草をするもので、先ほどのウケウエホムスにあたります。エムシリムセ（剣の舞）のような情景を想像すればいいでしょうか。

また、幌別の金成マツさんが書きとめた「Pon Oina」には、アイヌラックルが酒宴の場で演説する際に、槍の先を地面に立て、石突の上に顎をのせて朗々と話すという描写があります。これは、多くの物語に見られ、演説の際の典型的なスタイルといえます。

新冠のサンキロツテさんが語った「Kamui Oina」では、主人公を育てている姉が、主人公の氏素性を明かすときに、女の刀を差し、柄の短い槍で床を突き、力足を踏みながら語ります。そして、面白いことに、姉は「真の首領に向かって物語るときは武装するものだ」と言っているのです。

このように、物語の登場人物たちの振る舞いを見ていくと、改まった場面には武器を添えるのが決まりごとのようになっています。神事の中で宝刀を佩くのも、こうした思想と関わりがあるのは間違いないでしょう。

宝物の意味

では、すこし話を広げて、かつてのアイヌ文化における宝物の意味を考えてみましょう。そうすると、武器である刀剣類が宝物に加えられている理由もわかります。

さきに見たように、刀剣などの宝物は、美しいだけの飾りではなく、持ち主を霊的に守るものと考えられました。ほかにも、装飾を施した矢筒や、漆塗りの食器類も、持ち主を助けるといいます。マチコロ「女性の宝」といわれるガラス製の首飾りに、道中の安全を頼んだ祈り詞も残っています。人を守るものは、武器に限らないのです。

では、なぜこれらが宝とされたのでしょうか。高価なのはもちろんですが、それに加えて、珍しいものを神秘的に感じる感覚があつたためだと思います。

私たちは「ヘビの殻を財布に入れるとお金が増える」とか「四葉のクローバーを見つけるといいことがある」というジンクスを持っています。しらす干に入っている小さいタコや、アサリの中の小さなカニを見つけたときの感覚も、一脈通じるものがあります。かつてのアイヌ社会にも、珍しい物を見つると、お守りとして持つておくという習慣がありました。

例えば、ごくまれに角のあるヘビがいて、その角を授かると幸運になるといいます。また、真っ白なイタチをとって祭ると猟運が上がるといいます。川貝から出てきた真珠、隕石や石器、化石なども、宝物として持つていた人がいます。これらを大切に持つていて、その物に宿る力を借りることができるという思想があつたようです。これは、中国における、軟玉などの宝石に対する思想とも似ています。

宝刀や漆器、装飾品類は、外部社会からの流入品か、それを素材とした物でした。いわば、別世界からもたらされた特殊な品々であり、神秘的な価値を感じたのではないのでしょうか。

先にみたように、宝刀を使う場面の多くは、スピーチとセットでした。男性にとって「雄弁」は美德の一つであり、人前で話すときには、その技量を見られることとなります。また、祭司などの大役を任された時には、神々の前で失敗があつてはいけないう緊張が走ります。このとき、男性をバックアップしてくれるのが、サパウンペや宝刀といった祭具なのです。

(北原次郎太)

企画展「西平ウメとトンコリ」開催・その後

2005年10月29日から2006年1月23日にかけて、企画展「西平ウメとトンコリ」を開催しました。タイトルの通り、トンコリという楽器と、トンコリ演奏者である故西平ウメさんを詳しく紹介したものです。

近ごろ少しずつ知られはじめたトンコリですが、一般の人々からは、トンコリの音や弾き方がわかる資料が欲しいという声がありました。また、当館としても、公開事業にトンコリを取り入れたいという思いがありました。そこで、これまでの研究を整理し、展示という方法でわかりやすく多角的に情報を発信しようという考えからスタートしました。

展示のねらい

展示を行ううえでは、トンコリの歴史と、楽器の作り方、弾き方が伝わることを目標としました。

歴史の視点

トンコリは、樺太アイヌの楽器として紹介されることが多くなっています。実際に、トンコリ演奏を楽しむ樺太アイヌもいます。しかし、それはここ数年のことで、トンコリは、長いあいだ樺太アイヌの手から離れていました。それは、なぜなのか。

この展示では、ウメさんをはじめ、数人の樺太アイヌの足取りと作品を紹介しました。見学者は、作り手のプロフィールを知ること、樺太アイヌ史の一端をたどります。展示で紹介した人々はいずれも樺太出身ですが、作品はすべて北海道でつくられた物です。来館者に「なぜ？」という気持ちを持ってもらうことがねらいでした。

作るための展示

「作り方」を展示に取り入れたのは、トンコリ作りの輪を広げるためです。

トンコリは楽器ですので、いい音を出すためには、普通の木工とは違う工夫が必要です。しかし、そうしたノウハウは、作り手とともに一度絶えてしまいました。ですから、いいものを作るには、何よりも古い作品をよく見る事です。そこで、展示品を選ぶ際も、ただ数をそろえるのではなく、誰の作品かということ意識しました。すぐれた作品を選ぶほか、同じ作り手の作品を集めて見比べることで、それぞ

れの作り手への理解が深まるようにしました。

会場では、製作を実演するビデオも流しました。製作は野本正博が、撮影・編集は安田益穂が行い、北海道大学植物園にあるトンコリをモデルに、製作上のポイントを解説しながら、完成までの一連の工程を収めました。単なる工程を追うのではなく、工法を知りつつ作品を見る事で、作り手の業をリアルにイメージしてもらえようという意図です。撮影にあたり、使えるところには電動工具も使いました。これには、時間の無い人でもトンコリ作りを楽しめるように、という提案も含んでいます。

聞いて、弾く展示

「弾き方」の展示は、トンコリの紹介として、これまでにない試みだったと思います。ウメさんの演奏を録音したテープをお借りして、会場で常に流れるようにしました。また、音楽家の千葉伸彦さんに、内容を譜面にさせていただいたほか、演奏指導をしていただき、独習用のDVDを作りました。会場には職員が作ったトンコリと譜面を置き、来館者が関心の度合いに応じて演奏に触れられるようにしました。ちょっと手にとって音を出したり、構えて記念撮影という人もいましたが、楽器経験者は簡単な曲ならすぐにマスターして楽しんでいました。なかには、モニターの前で半日以上練習している来館者もいました。

準備中のこと

展示の準備は、作品や演奏の音源をそろえるところから始まりました。以前トンコリの作り手や弾き手について調べたことがありましたが、それは主に文献を使っただけのことでした。そこで、今回は実際にお話をうかがったり、博物館で実物資料を確認しました。この作業の中で、いろいろな出会いや発見がありました。ウタリ協会弟子屈支部長の八重清敏さんの協力によって、作り手の遺族の消息を知ることができたのもその一つです。これまでわからなかった多くのことを教えていただき、写真も借していただくことができました。

ウメさんの演奏テープは、杉村フサさんがお持ちでしたので、何度かお邪魔して、録音当時の状況や、その後の経過をうかがいました。

展示から生まれたもの

家族の歩みを見つめなおす

展示を通じて、私達も多くのものを得ました。私が個人的に最もうれしかったのは、幾人かの樺太アイヌがこの展示を訪れてくれたことです。

この展示には、さきの3つのテーマのほかに、樺太アイヌのための展示というコンセプトがありました。

過去30年程のあいだに、いくつかのアイヌ関係団体ができ、様々な取り組みが行われてきました。文化復興に携わる人も増え、アイヌに関する展示・催しに足を運ぶ人は更に多いと思います。

しかし、樺太アイヌの場合はかなり事情が違います。もともとの生活地を離れ、互いに離れて暮らしているためか、樺太アイヌのまとまった組織や活動はほとんどありません。ほんの数年前までは、北海道アイヌにも樺太アイヌを知らない人が多く、縁故が無いために、既存の団体に入会を断られたという話も聞きます。文化復興に対する雰囲気も、かなり温度差があります。

近年、樺太アイヌを取り上げた展示がいくつか開催され、こうした状況が変わりつつあります。展示が行われることを、社会が自分達の存在を認めた結果だと感じている人もいます。展示の中で紹介した方のご遺族の中には、展示を見て、家族や作品に対する見方が変わったという方もいました。また、新聞報道で展示を知り、見学に来てくれた方もいました。

展示には来られませんが、家族といっしょに解説書を読み、涙を流して喜んだという方もいたそうです。今後も、この展示をきっかけに生まれた人のつながりが、さらに広まることを願っています。

解説書『西平ウメとトンコリ』

展示の準備段階から、ウメさんの演奏をCDにしたいという思いがありました。ウメさんは、もっとも多くの演奏記録を残した方ですが、CDなどで誰もが聞ける形での公開はされていませんでした。

展示の終了後に、展示の内容をまとめ、千葉伸彦さんに音楽的な解説を書き下ろしていただいて解説書を刊行しました。本書には、ウメさんの演奏を収めたCD、展示会場で流していた製作工程と演奏指導の映像、千葉さんによる楽譜も収録しました。当初は、CDにごく簡単な説明を書いた冊子をつける程度の予定だったのですが、思いがけず豪華な本になりました。

入門用トンコリ

展示に先立ち、2005年8月から職員の演奏練習を開始しました。これは、当館での演示と体験学習にトンコリを加えることを目的としていました。しかし、職員の数に対してトンコリが足りないため、思うように練習ができないという声がありました。演奏人口を増やすためにも、普及版のようなトンコリが必要だと感じていたので、製作コストをおさえた簡易トンコリを考えました。

参考になったのは、ハワイのお土産だというサーフボードのような小さな板に、銅線を張った楽器でした。これだけのものでも立派に音がでることにヒントを得て、試作第1号を作りました（写真右）。その後、数回の改良を経て、体験学習と販売を開始しました。低コストで生産できるため、体験学習では、最大70名までを受け入れられるようになりました。クラス単位で取り組めるので、修学旅行生を中心に、利用者が増えています。

（北原次郎太）



展示のために集められたトンコリ



入門用トンコリと試作品（右）

上田トシさんを偲んで

2005年7月24日、上田トシさんがオヤモシリ（あの世）に旅立たれた。トシさんは1993年から1996年まで当アイヌ民族博物館に年一回来館されてアイヌ文化教室の講師を務め、また聞き取り調査にも協力して下さった大きな功績のあるアイヌ語の話者であった。私がトシさんと交流があったのは1994年のアイヌ文化教室から1997年に「アイヌ民族博物館伝承記録3・昔話 上田トシのウエペケレ」が刊行されるまでというごく短い期間でしかなかったが、その時期に経験した様々なことは、今でも私がものごとを考えるときの指針になっている。ここにトシさんと過ごした日々の思い出を記し、そのお人柄を偲ぶことにしたい。

私がトシさんに初めてお会いしたのは、1994年10月2日、アイヌ民族博物館ポロチセで行われた文化教室でのことだった。私にとってトシさんは、それまではアイヌ語学習教材のビデオやテキストの中の講師としてのみ知る人であり、大学を出た頃それだけを頼りにアイヌ語の勉強をしていた私にとっては雲の上の人のような存在だった。そのトシさんは、その日多くの参加者の前で悠然とアイヌ語で昔話を語られ、私はというとトシさんの語る内容が全く理解できず、たらたらと冷や汗をかいていたというのが記念すべき初対面のできごとであった。私はその年の4月にアイヌ民族博物館の学芸員としてアイヌ語を担当するというのを売りにして就職をしたのであったにも関わらず、語られるアイヌ語を目前にしてこの体たらくは何事かと、その時は恥ずかしさとショックで一言もトシさんと言葉を交わすことができないで終わった。

その時の反省と再奮起の時期を経て、トシさんと再びお会いしたのは1年後のことであった。1995年9月9日、トシさんに博物館救護室で聞き取り調査をする機会に恵まれた。その場には現在千葉大学教授の中川裕氏も同席しておられ、話の流れでトシさんのお姉さんであった故木村きみさんの昔話の録音テープを聞こうという話になった。幸いにもその時はテープの内容が理解でき、聞き終わった後で物語についてあれこれ話をする中に私も入っていくと、トシさんは不思議そうに私の顔を見て「あんた、どうやってアイヌ語の勉強をしたの？」といった。この

1年間カセットテープを何度も聞き、わからないところはわかるまで聞き直し、本で調べたという意味のことを答えると、トシさんは満足そうに「それでいいんだよ」とうなずいてくれた。その時初めてトシさんは私の名前を覚えてくれたのだと思う。

トシさんの昔話を音声付きテキストにした伝承記録を作ろうという話になったのはそれから間もなくのことであった。活字化と訳出は私が担当することになり、わからないところがあればトシさんの自宅まで行き、録音テープと一緒に聞いて確認した。この作業はつらいものとなった。トシさんは多分生まれて初めての経験として、過去に自分が語った昔話を聞いて「こういえばよかった」「こういうつもりだった」と反省するはめになってしまったのである。いつもは昔話を楽しそうに語るトシさんの顔にはいつしか苦痛の色が浮かんでいた。私は心の中でトシさんに謝りながら作業を続けた。この本が出たらアイヌ語の勉強をする若い人がきっと増えるから、辛いいいことをしているんだからトシばあちゃん頑張っ、と勝手な事を考えていた。

「アイヌ語の勉強をしたい」とか「本を作りたい」とか、思いが純粹だからという裏を被って私たちはアイヌ語話者のもとに通うが、それは話者の方の寛容さに支えられているから可能になるんだという面を忘れてはならないだろうと私は今にして思う。夢中になっているときは見えなくなりがちだが、地域の中で暮らす話者に対する配慮も大切である。伝承記録の編集作業が終わりに近づいた頃、こんなことがあった。トシさんと車で出掛ける途中、両替をしたいというのである商店に入った。私は何も考えずにトシさんの後について店に入っていった。お店の若い女性店員は両替をしながら「いいねえ、ばあちゃんお小遣いいっぱいもらっているんでしょう？」と喋りながら私のほうを見て笑った。私が驚いてトシさんの顔を見ると、平然としていたのでまた驚いた。それまで私があがががしていなかっただけで、もしかしてこうしたことはトシさんにとっては日常茶飯事だったのかも知れない。その後の車内でもトシさんは一切そのことには触れず、「あんなこといって、嫌だねえ」と軽口をたたいてくれるわけでもなかった。全てひとりで抱え込んで、自分のところ

に来る人には嫌な思いをさせまいとする姿に見えて痛々しかった。トシさんにとってはわずかな謝金を手にすることよりも、地域の人たちから孤立してしまうことのほうがずっと辛いことだったに違いない。でも調査にはいつも快く協力してくれていた。それは何故かという「アイヌ語は大切なものだから、正しく伝えたい」というのがトシさんの信念であったからだと思う。それは聞き取り調査の最中に私が「疲れだろうから休もうか?」という「口は疲れないんだから」といって休もうとしなかったことや、言葉の端々からうかがい知ることができた。でも本当はトシさんはその信念を貫くことの孤独をよく知っていたのであって、そのことがあってから私の存在はその大きな原因になっているということが頭から離れなくなってしまった。

私は伝承記録が刊行されてからしばらくして仕事を退職するなど様々な個人的な事情もあって、聞き取り調査を一切しなくなった。物理的にではなく、精神的にできなくなったというのが正確かも知れない。トシさんとの一連の作業は私にとってはいいことばかりだったけれど、トシさんにとってはどうだったろうか。もしかして辛い思いだけをして終わってしまったのではないだろうか。私の思いはトシさんの信念に見合うほど純粋だったといえるだろうか。そんな思いがまとわりついて来て、行こうと思えば思うほど行けなくなった。私は以後博物館で未

整理のままになっている音声資料の整理に没頭し、トシさんとの交流はそれきりになってしまった。入院の知らせを受けたときに一度お見舞いにいったが、トシさんはお昼寝の最中だったので失礼ながら寝顔をこっそり拝見し、やすらかだったので安心して帰って来た。そして一昨年の訃報を聞くこととなった。

トシさんは昔話を語るときは目を閉じていたが、時々目を開けて、私がちゃんと聞いているかどうかを確認すると、また目を閉じて語り続けるのが常だった(年長の方に対して失礼だが、その様子がとても可愛らしかった)。最後まで勝手な言い分になってしまうけれど、北海道に来てまさか自分でアイヌ語の調査ができるとは思っていなかった私にとって、トシさんのもとに通った日々は夢のようであった。私との関わりをトシさんがどのように思っていたかを今はもう確かめる術はない。私は今後もトシさんとの関わりを通じて自分が気付いた問題を抱えて、アイヌ語の復興に向けて自らの役割について考えていかなければならない。

トシさんはきっと今頃オヤモシリで、敬愛して止まなかったお姉さんと一緒に、アイヌ語で毎日語り合って幸せに暮らしているような気がしてならない。どうぞ心安らかな日々でありますように。

(安田 千夏)

博物館短信 行事報告(2005.4~2006.11)

平成17(2005)年 4 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 7日 白老町新規採用職員研修受入(当館研修室=2名)
- 16日 平成17年度第1回アイヌ語教室(当館映像展示室=講師:本田優子氏、参加者数:33名)
- 22日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催アイヌ工芸品展「ロシア民族学博物館アイヌ資料展 ロシアが見た島国の人びと」開会式出席(北海道開拓記念館=中村齋、村木美幸、北原次郎太)
- 25日 チブサンケ(ポロト湖畔)

5 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 7日 春のコタンノミ(当館ポロチセ)
- 8日 オメカブ(当館ポロチセ)
- 10日 トンコリ製作に伴う調査実施(北海道大学植物園フィールド科学センター=野本正博・北原次郎太・水野練平)

- 14日 平成17年度第2回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:20名)

平成17年度白老町新任教職員視察研修受入

- 15日 平成17年度第3回アイヌ語教室(当館研修室・ポロト湖周辺=講師:安田千夏氏、参加者数:19名)
- 25日 国立民族学博物館主催JICA平成17年度「博物館学集中コース」研修受入
札幌市アイヌ施策課、施設課職員視察研修受入

6 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 5日 平成17年度第4回アイヌ語教室バス見学会(札幌市=参加者数:28名)
- 6-7日 平成17年度胆振地区博物館等連絡協議会総会出席(虻田町=中村館長)
- 7日 平成17年度第1回アイヌ民族博物館評議員会、理事会開催
- 11日 平成17年度5回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:6名)

- 17日 平成17年度全国博物館館長会議出席（東京＝中村 齋）
 23日 平成17年度第6回アイヌ語教室（当館研修室＝安 田千夏氏、参加者数：4名）
 27-7月2日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催平成17 年度アイヌ工芸品展資料展示作業及び同展開会式出席 （神奈川県＝村木美幸）
 29日 平成17年度北海道博物館協会第1回役員会・第44 回北海道博物館大会実行委員会出席（小樽＝中村齋）
 30-7月1日 平成17年度第44回北海道博物館大会出席 （小樽＝中村齋、木田瑞恵）

7 月

- 1日 チュプカムイノミ（当館ポロチセ）
 2日 平成17年度第7回アイヌ語教室（当館映像展示室＝ 講師：安田千夏氏、参加者数：14名）
 3日 平成17年度第8回アイヌ語教室（当館映像展示室＝ 講師：安田千夏氏、参加者数：12名）
 9日 平成17年度第1回アイヌ文化教室「オオウバユリか らでんぷんをとろう」（館内＝講師：村木美幸、参加 者：12名）
 9-10日 日中友好の翼コンサート出演（札幌＝野本三治、 山田真由美、橋本詩穂）
 13日 トンコリ研究調査実施（旭川＝村木美幸、北原次 郎太）
 16日 平成17年度第9回アイヌ語教室（当館研修室＝講 師：本田優子氏、参加者数：17名）
 22日 平成17年度第10回アイヌ語教室（当館研修室＝講 師：安田千夏氏、参加者数：11名）
 23日 しらおいカルチャーナイト実施
 25 - 29日 白老町教職員研修受入（当館映像展示室・研 修室、参加者数＝15名）
 26日 国土交通省職員演習講師派遣（札幌＝野本正博）
 29-8月17日 アイヌ民族博物館特別企画「ポロトコタン の夜」実施
 31日 平成17年度第2回アイヌ文化教室「アイヌ音楽講 座」（当館ポロチセ＝千葉伸彦氏、参加者数：48名）

8 月

- 1日 チュプカムイノミ（当館ポロチセ）
 1-6日 夏休みトンコリ演奏会（当館サウンチセ＝演奏 者：千葉伸彦氏）
 博物館学芸員実習受入（9名）
 5日 北海道大学アイヌ納骨堂イチャルパ出席（札幌＝野 本勝信）
 7日 平取町・二風谷フォーラム2005参加（平取＝北原 次郎太）
 札幌大学宿泊体験受入（当館ポンチセ・ポロチセ 17名）
 8-12日 愛知万博カナダ主催「先住民族言語シンポジウ ム」講師派遣（愛知県＝北原次郎太）
 10日 北海道ウタリ協会白老支部主催アイヌ碑建立除幕 式典出席（記念広場＝中村齋・飯島博光）
 12日 平成17年度第11回アイヌ語教室（当館映像展示 室＝講師：安田千夏氏、参加者数：6名）
 15-27日 苫小牧駒澤大学主催北欧先住民文化交流事業参 加（フィンランド・ノルウェー・スウェーデン＝中村 齋）

- 17日 シンヌラッパ実施（当館ポロチセ）
 シリカブ送り儀礼実施（当館ポロチセ）
 20日 川村カ子トアイヌ記念館チセノミ参加（旭川＝野 本正博）
 21日 平成17年度第12回アイヌ語教室（当館研修室＝講 師：本田優子氏、参加者数：10名）
 22日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催アイヌ語指導 者育成事業講師会議出席（札幌＝北原次郎太）
 24日 トンコリ研究調査実施（旭川＝村木美幸、北原次 郎太）
 26日 平成17年度第13回アイヌ語教室（当館映像展示 室＝講師：安田千夏氏、参加者数：9名）
 27-29日 トンコリ研究調査実施（釧路＝村木美幸、北原 次郎太）
 31-9月6日 博物館学芸員実習受入（2名）

9 月

- 1日 チュプカムイノミ（当館ポロチセ）
 北海道博物館協会役員会出席（白老町＝中村館長）
 北海道博物館協会主催平成17年ミュージアム・マ ネージメント研修会参加（白老町＝野村茂樹、中村齋、 村木美幸、木田瑞恵）
 3日 「北海道内の主要アイヌ資料の再検討」の研究会出 席（札幌＝児玉マリ、村木美幸）
 平成17年度第3回アイヌ文化教室「学校教育とアイ ヌ」（当館映像展示室＝講師：本田優子氏、参加者＝ 28名）
 4日 ベッカムイノミ実施（白老町ウヨロ川）
 7 - 9日 トンコリ研究調査実施（興部町＝村木美幸、北 原次郎太）
 9日 平成17年度第14回アイヌ語教室（当館映像展示 室＝講師：安田千夏氏、参加者数：5名）
 11日 ウタリ協会登別支部主催ベッカムイノミ参加（登 別＝野本正博）
 12 - 13日 トンコリ研究調査実施（函館＝児玉マリ、村 木美幸、北原次郎太）
 19日 札幌アイヌ文化協会、アシリチェブノミ実行委員 会主催アシリチェブノミ参加（札幌＝野本正博）
 23日 白老町主催食材王国しらおい誇りある故郷づくり 「アイヌの食文化」展示協力（白老＝木田瑞恵）
 24日 アイヌプリ結婚式「umuureh」実施
 25日 平成17年度第15回アイヌ語教室（当館研修室＝講 師：本田優子氏、参加者数：12名）
 30日 ウタリ協会白老支部主催シンヌラッパ出席（白老 町ボンアヨロ＝飯島博光）
 平成17年度第16回アイヌ語教室（当館映像展示 室＝講師：安田千夏氏、参加者数：5名）

10 月

- 1日 チュプカムイノミ（当館ポロチセ）
 7日 檜山教育局平成17年度教職経験者研究協議会講師派 遣（函館市＝中村齋）
 14日 平成17年度第17回アイヌ語教室（当館研修室＝講 師：安田千夏氏、参加者数：8名）
 15日 平成17年度第18回アイヌ語教室（当館研修室＝講 師：本田優子氏、参加者数：7名）
 17-18日 トンコリ研究調査実施（函館市北方民族資料 館＝村木美幸、木田瑞恵）

- 19日 トンコリ研究調査実施(北海道開拓記念館・北海道大学植物園 = 野本正博、北原次郎太)
- 20-21日 トンコリ研究調査実施(釧路市博物館・弟子屈町屈斜路コタン = 野本正博、北原次郎太)
- 21日 平成17年度アイヌ民族博物館第3回理事会開催
- 28日 平成17年度第19回アイヌ語教室(当館研修室 = 講師: 安田千夏氏、参加者数: 4名)
- 29日 ミュージアムトーク「西平ウメとトンコリ」(当館特別展示室 = 講師: 北原次郎太、参加者: 30名)
- 29-30日 北海道ウタリ協会主催アイヌ語指導者研修会出席(鶴川町 = 安田千夏氏、野本三治、北原次郎太、木田瑞恵)
- 29-1月23日 企画展「西平ウメとトンコリ」開催

11 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 4日 平成17年度第20回アイヌ語教室(当館研修室 = 講師: 安田千夏氏、参加者: 5名)
- 4-6日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催平成17年度アイヌ語指導者育成事業第2回スクーリング講師派遣(札幌市 = 北原次郎太)
- 10日 平成17年度第21回アイヌ語教室(当館研修室 = 講師: 安田千夏氏、参加者数: 5名)
- 11日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催アイヌ語弁論大会イタカンロー参加(白老町コミュニティセンター: 石田慈久恵、木田瑞恵、田村聡衣、吉村直希)
- 12日 秋のコタンノミ(当館ポロチセ)
- 12-13日 伊勢神宮勾玉会主催「伊勢神宮勾玉祭」舞踊公演(三重県 = 村木美幸、野本三治、倉部テル子、水野練平、山田真由美、伊藤里美、広瀬智美、小崎明日香)
- 13日 オメカブ(当館ポロチセ)
- 15-18日 「北海道内の主要アイヌ資料の再検討」北海道大学植物園調査参加(札幌市 = 北原次郎太)
- 16-19日 全国博物館大会出席(東京都 = 中村齋)
- 19日 札幌大学ペリフェリア・文化学研究所公開シンポジウム「クマ送りの世界」講師派遣(札幌市 = 村木美幸)
- 22日 平成17年度第22回アイヌ語教室(当館映像展示室 = 講師: 北原次郎太、参加者数: 32名)
- 26日 札幌大学公開講座講師派遣(札幌市 = 村木美幸)

12 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 2-4日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催平成17年度アイヌ語指導者育成事業第3回スクーリング講師派遣(札幌市 = 北原次郎太)
- 11日 平成17年度第23回アイヌ語教室(当館研修室 = 講師: 北原次郎太、参加者数: 6名)
- 17日 平成17年度第24回アイヌ語教室(当館映像展示室 = 講師: 北原次郎太、参加者数: 28名)
- 18-23日 松前城資料館アイヌ資料調査参加(松前町 = 村木美幸)

平成18(2006)年 1 月

- 6日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 10日 北海道大学大学院「先住民族研究特殊講義(アイヌと北方少数民族)」講演者派遣(札幌市 = 北原次郎太)

- 17日 平成17年度第25回アイヌ語教室(当館研修室 = 講師: 本田優子氏、参加者数: 34名)
- 21日 アイヌの食文化講座「オハウとスム(魚編)」(当館体験学習館 = 講師: 野本リヨ氏、村木美幸、参加者: 30名)
平成17年度第4回アイヌ文化講座「民族と大地: イオル構想の可能性」(当館映像展示室 = 講師: スチュアート・ヘンリ氏、参加者: 59名)
- 22日 アイヌの食文化講座「ラタシケブ編1」(当館体験学習館 = 講師: 村木美幸、倉部テル子、参加者: 20名)
- 28-29日 JTB主催「杜の賑わい・沖縄」舞踊公演(沖縄県 = 山丸郁夫、吉村直希、村木美幸、高橋志保子、田村聡衣、石田慈久恵、山田真由美、広瀬智美、伊藤里美、渡邊はるみ、村田真沙美、小崎明日香)
- 30日 内閣府主催「首里城花まつり」舞踊公演(沖縄県 = 山丸郁夫、吉村直希、村木美幸、高橋志保子、田村聡衣、石田慈久恵、山田真由美、広瀬智美、伊藤里美、渡邊はるみ、村田真沙美、小崎明日香)

2 月

- 7日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 20日 紋別市主催「氷海の民シンポジウム」講演者派遣(紋別市 = 北原次郎太)
- 21日 日胆地区博物館等連絡協議会臨時拡大役員会出席(苫小牧市 = 中村齋)
- 24-25日 国立民族学博物館国際フォーラム「小規模民族集団の現状と課題 東アジアにおける多様な文化の共生」出席(大阪府 = 野本正博)
- 25日 アイヌの食文化講座「オハウとスム(肉編)」(当館体験学習館 = 講師: 村木美幸、参加者数: 35名)
平成17年度第5回アイヌ文化講座「先住民族の法的地位」(当館映像展示室 = 講師: 常本照樹氏、参加者: 37名)
- 26日 アイヌの食文化講座「ラタシケブ編2」(当館体験学習館 = 講師: 村木美幸、参加者数: 17名)

3 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 2-4日 千葉大学「国際研究フォーラム グローバリズムのなかの口承文芸」講演者派遣(千葉県 = 北原次郎太)
- 3日 平成17年度第26回アイヌ語教室(当館映像展示室 = 講師: 安田千夏氏、参加者数: 7名)
- 5-6日 法政大学研究会受入(当館映像展示室)
- 8日 平成17年度第28回アイヌ語教室(当館映像展示室 = 講師: 北原次郎太、参加者数: 26名)
- 10日 平成17年度第29回アイヌ語教室(当館映像展示室 = 講師: 安田千夏氏、参加者数: 11名)
- 11日 平成17年度第6回アイヌの食文化講座「伝統食材をつかおう」(当館体験学習館 = 講師: 大須賀るえ子氏、村木美幸、参加者29名)
北海道ウタリ協会主催「平成17年度青年・女性の集い」講演者派遣(札幌市 = 野本正博)
平成17年度第6回アイヌ文化講座「近代北海道の土地制度」(当館映像展示室 = 講師: 山田伸一氏、参加者: 33名)
- 12日 アイヌの食文化講座「お茶と菓編」(当館体験学習館 = 講師: 倉部テル子、村木美幸、参加者23名)

- 17日 平成17年度第30回アイヌ語教室(当館映像展示室=講師:安田千夏氏、参加者数:11名)
- 19日 千葉大学「ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料再検討・目録準備及びアイヌ物質文化の諸問題に関する検討会」参加(札幌市=村木美幸)
- 20日 国立民族学博物館主催国際フォーラム情報交換会受入(当館研修室)
- 23日 平成17年度第3回北海道博物館協会役員会出席(札幌市=中村齋)
- 24日 平成17年度アイヌ民族博物館第4回評議員会、理事会開催(当館研修室)
国立民族学博物館主催国際フォーラム出席(大阪府=野本正博)
- 29日 国土交通省主催「アイヌ文化伝承に関する勉強会」講師派遣(東京都=村木美幸)

4 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 24日 チブサンケ(ポロト湖畔)

5 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 6日 春のコタンノミ(当館ポロチセ)
- 7日 オメカブ(後祭り)(当館ポロチセ)
- 21日 アイヌの食文化講座「ヤイトウッカキナ観察会」(ポロトの森=講師:安田千夏氏、参加者:10名)
- 24日 国立民族学博物館主催平成18年度JICA「博物館学集中コース」研修受入(当館研修室)
- 27日 JTB主催「杜の賑わい北海道・函館」古式舞踊公演(函館市=山丸郁夫、田村聡衣、石田慈久恵、水野練平、渡邊はるみ、北原次郎太)
- 28日 平成18年度第1回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:7名)

6 月

- 2日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 7日 日胆地区博物館連絡協議会出席(三石町=中村館長、村木美幸)
- 10日 平成18年度第2回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:7名)
- 20日 登別市婦人短期大学「のぼりべつ物知りコース郷土史講座」講師派遣(登別市=村木美幸)
- 21日 日本博物館協会主催平成18年度全国博物館館長会議出席(東京都=中村齋)
- 24日 平成18年度アイヌの食文化講座「トゥレフタ」(当館敷地内=講師:村木美幸、参加者:14名)
- 25日 平成18年度アイヌの食文化講座「オオウバユリの澱粉料理」(当館ポロチセ=講師:村木美幸、参加者:17名)
平成18年度第3回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者人数:11名)
- 26-30日 北海道内の主要アイヌ資料の再検討 北海道大学植物園博物館調査参加(札幌市=北原次郎太)

7 月

- 1日 水野職員アイヌプリ結婚式「utomnukar」実施
- 9日 平成18年度第4回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:8名)

- 20日 アイヌ民族博物館特別企画「ポロトコタンの夜」実施
- 23日 平成18年度第5回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:9名)
- 28-27日 しらおいカルチャーナイト実施
- 30日 アイヌ民族博物館特別企画「ポロトコタンの夜」実施

8 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 4日 アイヌ民族博物館特別企画「ポロトコタンの夜」実施
旭川市博物館加茂館長他4名来館
- 5日 アイヌ民族博物館特別企画「ポロトコタンの夜」実施
- 6日 白老町教育委員会主催平成18年度歴史と文化のまちPR体験事業「ポロト遺跡見学と縄文づくり」講師派遣(白老町埋蔵文化財整理事務所=中村齋)
平成18年度第6回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:8名)
- 7-12日 博物館実習生4名受け入れ
- 11日 アイヌ民族博物館特別企画ポロトコタンの夜実施
- 17日 シリカブ送り儀礼実行委員会主催シリカブ送り儀礼実施(当館ポロチセ)
シンスラッパ実施(当館ポロチセ)
- 21日 平成18年度第7回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:46名)
サハリン州郷土博物館研究者視察
- 21-23日 平成18年度大学合同合宿実施

9 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ポロチセ)
- 3日 平成18年度第8回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数8名)
- 4日 ベツカムイノミ(当館ポロチセ、ウヨロ川河川敷)
- 7日 道民カレッジ大学放送講座「ほっかいどう大学」取材協力
- 10日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催アイヌ工芸品展へ資料貸し出し(22点)
- 11日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催平成18年度アイヌ語指導者育成事業講師会議出席(札幌市=北原次郎太)
- 21日 平成18年度第9回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:46名)
- 24日 アイヌの食文化講座「サケ」実施(当館体験学習館=講師:村木美幸、参加者数:17名)
平成18年度第1回アイヌ文化講座「中国北方少数民族ホジェンの皮革加工」(当館映像展示室=講師:李林静氏、参加者数:25名)
平成18年度アイヌ民族博物館評議員会実施(当館研修室)
- 28日 日胆地区博物館等連絡協議会職員研修会(浦河町=中村齋、木田瑞恵)
- 29-10月1日 アイヌ文化振興・研究推進機構平成18年度アイヌ語指導者育成事業スクーリング講師派遣(白老町=北原次郎太)

10 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ボロチセ)
- 2日 全国紺綬友好会会長会舞踊公演(札幌市=山丸郁夫、渡邊はるみ、小崎明日香、山内久美子)
- 7日 平成18年度第2回アイヌ文化講座「縄文文化に見るアイヌ文化のめばえ」(当館映像展示室=講師:大島直行氏、参加者数:24名)
- 7-12日 博物館実習生受け入れ(1名)
- 8日 少林寺拳法全国大会舞踊公演(札幌市=山丸郁夫、水野練平、高橋志保子、田村聡衣、伊藤里美、山田真由美、久保紀子、山内久美子、中野巴絵)
- 12日 高崎市染料植物園へ資料貸し出し(16点)
- 15日 平成18年度第10回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:10名)
- 21-22日 平成18年度国立民族学博物館共同研究会受入(当館映像展示室)
- 26-27日 北海道博物館協会平成18年度第2回役員会及びミュージアム・マネージメント研修会出席(厚岸町=中村館長)
北海道教育委員会主催平成18年度アイヌ民俗文化財専門職員研修会講師派遣(札幌市=野本正博)
- 26日 黒龍江省文化庁研究者4名来館
- 27-29日 アイヌ文化振興・研究推進機構平成18年度アイヌ語導育育成事業第2回スクーリング講師派遣(白老町、当館研修室=北原次郎太)
- 28日 秋のコタンノミ(当館ボロチセ)
- 29日 オメカブ(当館ボロチセ)

11 月

- 1日 チュプカムイノミ(当館ボロチセ)
- 4-5日 北方文化振興協会主催第21回北方民族文化シンポジウムへの講師派遣(網走市=野本正博)
- 4-5日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催平成18年度アイヌ工芸品展におけるムックリ製作体験学習及びアットゥシ製作実演実施(福岡県=岡田恵介、河岸麗子)
- 6日 「北海道内の主要アイヌ資料の再検討」北海道大学植物園調査参加(札幌市=村木美幸、北原次郎太)
- 9日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催平成18年度アイヌ語弁論大会「イタカンロー」参加(様似町=石田慈久恵、小崎明日香、木田瑞恵)
- 16-17日 第54回全国博物館大会出席(長崎県=中村館長)
- 14日 北海道文化財保護協会主催「子どもの文化財愛護活動」講師派遣(苫小牧市=村木美幸)
- 15日 職業体験受入(白老町立白老中学校生徒12名)
- 18日 札幌大学ペリフェリア・文化学研究所シンポジウムへの講師派遣(札幌市=北原次郎太)
- 23日 平成18年度第3回アイヌ文化講座「アイヌエコシステムの考古学」(当館映像展示室=講師:瀬川拓郎氏、参加者数:26名)
平成18年度第11回アイヌ語教室(当館研修室=講師:本田優子氏、参加者数:9名)
- 25日 札幌大学公開講座の講師派遣(札幌市=北原次郎太)
- 29日 アイヌ文化振興・研究推進機構主催アイヌ工芸品展資料貸し出し

INFORMATION

人事異動

平成17年度

- 異動 総務課総務係 山丸悦子(伝承課伝承係)
- 採用 学芸課学芸係 楠本次郎太
- 派遣 事務局長 飯島博光(白老町役場)

アイヌ民族博物館刊行物のお知らせ

『西平ウメとトンコリ』(トンコリ音源CD・DVDビデオ(トンコリ製作法、演奏法)・楽譜付)
2005年12月27日 A4 95ページ ¥10,290

『アイヌ民族博物館研究報告』第9号

2006年3月31日 B5判 55ページ ¥1,050

- ・「アイヌ民族の伝承有用植物に関する調査研究(第14報) ツルニンジンおよびバアソブ塊根の調理法と差異と食味・栄養成分について」
姉帯正樹/山口敦子/山本愛子
- ・「アイヌ民族の伝承有用植物に関する調査研究(第15報) イケマの試作栽培および若芽の栄養成分分析」 姉帯正樹/南 収
- ・「『室蘭毎日新聞』掲載アイヌ関係記事:目録と紹介(2)」 小川正人

入場者数

平成17年度入場者数

平成17年4月	7,635人	10月	34,067人
5月	25,637人	11月	12,795人
6月	35,597人	12月	11,498人
7月	26,788人	平成18年1月	7,095人
8月	23,768人	2月	9,675人
9月	29,519人	3月	6,864人
		計	230,938人
		(前年度比)	34,196人 12.9%
平成18年4月1日~11月30日	入場者数	206,628人	
	(前年度比)	10,822人	5.53%

アイヌ民族博物館だより

No.53

2006年12月1日

編集・発行 財団法人アイヌ民族博物館

住所 〒059-0902 北海道白老郡白老町若草町2-3-4

電話 0144-82-3914 FAX 0144-82-3685

e-mail museum@ainu-museum.or.jp

HP http://www.ainu-museum.or.jp

印刷: (株)北海道機関紙印刷所